

とくほん  
「清貧の行者・徳本上人」

## 徳本念仏塔



▲小見川金刀比羅神社前の路傍

# 香取遺産

Vol. 32

路傍や浄土宗・天台宗の寺院などに、独特な丸文字で終筆がはねあがる書体で正面に「南無阿弥陀佛」と刻まれた石碑を見かけることがあります。

これは、江戸時代に南無阿弥陀仏を唱え、全国を歩いて民衆に念仏を広めた「徳本上人」の念仏塔です。

現在市内では、佐原西関戸の子育地藏尊裏墓地・磯山の願海寺・扇島の長泉寺・大倉の船越地藏堂前・一ノ分目の善雄寺・三ノ分目の円福寺・下小堀の浄福寺・小見川大根塚の金比羅神社前の路傍・川頭の青年館（光明院跡）・下飯田の西音寺・阿玉川の八坂神社脇の共同墓地・山倉の応福寺で確認されています。

これらの形状や石材はさ

まぎまぎですが、正面には「南無阿弥陀佛 徳本」、徳本の下に丸く描かれる花押が認められます。側面や裏面には村名、造立者、造立年月日などが記されています。

徳本上人は、宝暦8年（1758）に現在の和歌山県日高郡日高町に生まれ、27歳で出家、草庵に住み、木食行を行いながら、独学で念仏の奥義を悟ったと言われています。

寛政6年（1794）ころからは日本各地を行脚し、「徳本講」と呼ばれる念仏講（木魚と鉦を激しく叩くという独特な念仏）を組織し、清貧な生き方を指導して廻りますが、文化11年（1814）、江戸増上寺の典海の要請により、江

戸小石川にある伝通院の一行院を再興し、ここに住いを定めます。これから間もない文政元年（1818）、一行院で弟子にみとられて61年の生涯を終えています。

上人は、文化13年（1816）2月を皮切りに3回にわたって下総地方を訪れています。この地での石碑の建立年が文化13年（1816）と15年（1818）のものが多いことから、「徳本講」が短期間に浸透したことを伺い知ることができま

す。徳本念仏塔は、上人が巡教した土地に多く建てられました。その数は全国各地で千基を超えと言われおり、その信仰は今に受け継がれています。